

縄文顔と 弥生顔

NO.6



A

最近の人類学の研究によれば、日本人のルーツは二通りあるとされている。

約二万年近く前、東南アジアに住んでいた種族が北上を始め、その一部が当時陸続きだった台湾や沖縄を経て日本へやってきた。日本に縄文文化を築いた人たちである。これに対して約二千年百年前に、中国の大陸奥の寒冷地から朝鮮半島を経て日本に南下してきた渡来人がいた。その人たちは弥生文化の担い手となった。

南方からの縄文人と北方からの弥生人、前者の

顔を「縄文顔」、後者の顔を「弥生顔」と強引に呼ぶならば、両者にははっきりとした違いがある。

南方系の縄文顔は、四角い形をしていて彫りが深く、立体的である。特に眉間が隆起して鼻も突き出ている。それに対して、寒冷地である大陸から来た弥生顔は、長円形で彫りが浅くて偏平である。寒いところでは熱が逃げないことが重要で、表面積を小さくするために顔が丸くなったのである。鼻は低く、皮下脂肪も弥生系のほうが厚い。南方系はまぶたの肉が薄くて二重が多いのに対し、北方系はほとんど一重まぶたになっている。

また、縄文系はひげが濃い弥生系は薄い、耳たぶは縄文系が豊かで弥生系はほとんどない。寒冷地ではひげには凍った水分がつきやすく、また耳たぶが豊かだと凍って落ちてしまう危険性があるからである。さらに言うと、縄文系は、歯は比較的小さくて歯並びがよく、前歯の先端がぴったりに合っている。それに対して弥生系は歯が大きく、上の前歯が突き出ている。北の国では凍った食物を咬んだり、羊等の皮をなめすために丈夫な歯が必要だったからである。

このように日本人の顔には二つのルーツがある。といっても、今の日本人はそれぞれの混血であるから、典型的な縄文顔、弥生顔を探すことは難しい。しかし、場所を上手に特定すれば何らかの傾向を探れるかもしれない。たとえば九州。九州には二通りの日本の玄関がある。一つは南九州、南方から日本にやってきた縄文時代人の玄関になった。いま一つは北九州で、朝鮮半島を経て北東アジアからやってきた弥生人の玄関であった。

はたして、南九州と北九州では、顔に違いがあ

Hiroshi Harashima heikingao no sekai

はらしま・ひろし

1945年生まれ。東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程修了。東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授。コミュニケーション、電子情報工学専攻。日本顔学会理事。著書・共著に『情報と符号の理論』『仮想現実への序曲』『人の顔を変えたのは何か—原人から現代人、未来人までの顔を科学する』『顔学への招待』などがある。



B

るのだろうか。そこでそれぞれの「平均顔」を作成してみた。ただし、平均をとる対象は、できるだけその土地に昔からいる人の顔が望ましく、それぞれの土地の地方政治家の顔写真を拝借することにした。さらに、その土地に比較的多い苗字の男性の顔写真を選ばせていただいた。

こうして作成されたそれぞれの「平均顔」が、今回の掲載写真である。右が南九州、左が北九州である。写真は少しだけその特徴が強調されているが、南九州の平均顔は典型的な縄文顔、北九州

は典型的な弥生顔になった。前者は、沖縄の顔に近く、後者は（研究室の韓国からの留学生によれば）韓国人の顔とほとんど区別がつかなかった。

さて、このような縄文顔と弥生顔、実は日本の歴史において、両者には明確な差別があった。簡単に言うと、大陸から農耕文化という高度な文明をもってきた弥生人は、九州北部から近畿地方へ進出し、日本の支配階級になった。それにつれて先住民であった縄文人は地方に押しやられてしまった。支配階級が弥生人であったので、日本では高級な顔、モテる顔は弥生顔、という時代が歴史的に長く続いたのである。

たとえば、平安の絵巻物等に載っている顔は、目が細く丸顔という典型的な弥生顔である。江戸時代の浮世絵も、ほとんどが弥生顔を様式化したものになっている。一方、縄文顔は、弥生顔の貴族からは自分達とは違う顔、危害を加えかねない怖い顔に見えたのだろう。縄文顔の特徴を際立たせてきた顔が「鬼の顔」である。

このように日本では、長いこと縄文顔は低く見られてきた。ところが第二次大戦後になって、事情は一変する。西洋的な彫りの深い顔つまり縄文顔が憧れの対象になったのである。女性の好みも弥生的な一重まぶたよりも縄文的な二重まぶたである。ジャニーズ系と呼ばれる美少年アイドルの顔も、どちらかと言えば縄文系が多い。

もちろん歌舞伎役者に代表される弥生系の顔も、相変わらずもてている。その意味では、ようやく日本では顔による差別がなくなった。縄文顔はソース顔、弥生顔はショーユ顔と呼ばれることもある。あなたの好みははたしてどちらだろうか。